

## 俳句の題材（三度）II

山口青邨

數年前のことだが、浮浪兒といふ題材が流行したことがある、これは吉屋信子さん（小説家）が浮浪兒を詠んで、一躍ホトトギス巻頭を占めたことがあるが、それ以来である。

浮浪兒の嘗めて離さず甘茶杓 信子

浮浪兒の俄かにはしゃぐ花吹雪 同

これは材料そのものが新しいといふ例である。

題材は一つのパテントである、作者の發見で作者の所有である、みんなはこれを濫用してはいけない。

次にものの見方が新しいといふことに就てである。

先程バラや牡丹の晝のことを言ったが、何十年も何百年もにわたって、何百人、何千人の人によってバラや牡丹が描かれて来てゐる、然しそこに何か新鮮なもの、異なるものを見、感ずるのは、時代と人との變遷によって、ものの見方が夫々異なるからである、アングルを變へて見るからである。感じ方が異なるからである。

干足袋の天驅けらんとしてゐたり 泰

足袋を洗つて、庭先の何か棒の先にでも干してあるのだが、それが天にのぼつて驅けてゆくやうに見える、ベガサス——ともいふやうな恰好をしてゐる、作者はそれをかう見たのである。

表面に水底があり水澄める 泰

これも同様である、獨特の見方、感じ方である。

曼珠沙華散るや赤きに堪へかねて 朱鳥

曼珠沙華が眞紅だ、今散つてゐる——、かういふ状態を、かう見たのである、見るといふことは感じ方である、心である。

赤く見え青くも見ゆる枯木かな たかし

金魚大鱗夕焼の空の如くなり 同

露草の拜める如き荅かな 同

この作者がまだ若かった頃の感受のするどい見方である。これはただアングルを變へて見たといふだけではない、つまり感覺が鋭いのである。

次に表現の新しいものに就てである。

子守宮の身を狂はせて逃げにけり 朱鳥

子守宮の驅けとまりたるキの字かな 同

春着の子走り交して色交し 泰

風車色を飛ばして廻りそめ 同

この表現法に就ては述べるのが澤山あるが、要言すれば、つまり雑念のない清らかな、純眞な子供の感じを大人がもつて、それを處理したといふやうな表現法である。

以上三つに分けて考へて見たが、古いもの、すでに言ひふるされたことでも、かういふ心の用意、感受の練磨があれば面白くなるのである、題材はかうして常に新しいのである。